

自分らしく生きる基礎は “自分の身体を守ること”

池上 清子

「場所によって、こんなにも女性の命の重さに違いがあっているのか」。ニューヨークの国連本部に勤務していた私が、自身の難産を通じて抱いた思いです。最新設備の整った病院で医師や看護師の方々に助けられ、帝王切開で娘を出産しました。「これが、もしアジアやアフリカの田舎だったら、自分も娘も死んでいた」。タリバン政権時代のアフガニスタンでは、女性の医療従事者は外出を禁止され、その結果、妊産婦死亡率が激増しました。男性の医師が女性を診察できないという社会的な慣習・制約があり、妊産婦が医療サービスを受けられなかったためです。

サハラ以南のアフリカには、“シュガー・ダディ”という裕福な年上の男性に、10代の女性が身体を売って、生活費や学費を得ることがあります。その結果、女性がHIVに感染することも多く、貧困ゆえに、健康を犠牲にしているのです。

女性が自分の身体を知り健康を守ることは、健康管理の範疇^{はんちゆう}に留まりません。それは、自ら人生を設計し、自立していく基礎となるのです。女性の自立というと、教育、労働、政治、法律など社会的な側面から語られがちですが、自分の健康を守ることができない状況で、自立を語ることはできません。と同時に、貧困に加えて女性の地位の低さが、二重に女性の健康に大きな影響を与えています。

そこで、重要なことは、女性が生涯にわたって、健康分野で自己決定するための知識や情報、教育を得ることや、政治や経済の分野でも、力をつけて文化や社会の規範、制度を変革し、女性の健康を守るサービスを充実させていくことだと思います。その実現には女性同士の連帯が欠かせません。知見や経験を分かち合うことで向上できます。さらに、男性の協力を得ることで、大きな変化を生んでいくことができるのです。これこそ、「持続可能な開発目標 (SDGs)」が目指す「我々の社会を変革する」ことにつながるのではないのでしょうか。



PROFILE

いけがみきよこ：(公財) ブラン・インターナショナル・ジャパン 理事長。大阪大学にて博士(人間科学)を取得。国連難民高等弁務官事務所、国連本部、(公財) ジョイセフ、国際家族計画連盟、国連人口基金、日本大学大学院教授などを経て現職。開発途上国での女性の健康、人口、HIVとエイズなどの諸問題に取り組む。保健分野 NGO 間のネットワーク構築にも寄与。